出生率一・五三の陰で

鳴海　風

あいも変わらず、会社生活、私生活、私の周辺は超多忙である。そんな中、会社で契約しているリゾートホテルに、妻が申し込み当選したので、七月の末有休をとり、一泊で八ヶ岳、清里へ行ってきた。

五、三、一歳（女、男、女の順）という、腕白ざかりの子連れでは、疲れに行くようなものだが、日頃の家族サービス不足の後ろめたさもあって、ままよと出かけた。

自宅から目的地までは、高速道を乗り継いでも、およそ五時間はかかる。連日の猛暑の中、長時間ドライブに耐えられない子供のことを考え、前日の夜、入浴後すぐパジャマに着替えさせ、眠らせながら走ることにした。目的地寸前のサービスエリアへ着いたらそこで仮眠し、夜明けを待って行動を起こす。こっちは、ほとんど徹夜に近いが仕方ない。

先ず、清里にある清泉寮をめざす。早朝の清泉寮は、人影はまばらだった。空気はあくまでも澄んで、樹木の緑も空の青さも町では見られない瑞々しさだ。車を置いてとぼとぼ散歩する北欧風の農場は、時間と空間を飛び越えた別世界だった。通行中の車を止めて搾乳場へ何十頭もの牛を横断させている景色ものどかで、子供らの目が輝いている。

しかし、ミルクをたっぷり使った、黄色っぽいソフトクリームを、並んでやっと子供らに食べさせたあたりが、この旅行の限界だったかもしれない。

若い娘を狙ったガイドブックには必ず出ている、手作りクッキーの店やドライフラワーの店など、子供らには退屈なコースである。

昼食もどうにか有名なレストランに入り、午後も、人気の高い清里の森へ回ったが、ここで妻も観念した。結局、子供らを清里の森内の公園で遊ばせることになった。フィールドアスレチックと滑り台を組み合わせた遊具は、子供らを飽きさせない。人工池に群れをなす、あめんぼやおたまじゃくし、手足の生えそろったばかりの小蛙たちは、際限なく子供らの想像力をかきたてた。水際に一列に並ぶ小蛙たちと子供らは、確かに会話をしていた。とはいえ、こんなことをさせるのなら、もっと近くでもよかったたわけだ。

早々とホテルへチェックインし、長女と長男を連れて付属の露天風呂へ向かった。ところが、脱衣所へ着くやいなや、見知らぬ男たちを見た娘が、入るのは嫌だと言いだした。こうなると、どんな理屈をこねようと、それは大人の勝手だ。娘を部屋まで連れ帰り、ようやく息子と風呂へ入ったが、熱い風呂が苦手の彼を、ぬるい風呂からだましだまし熱い風呂に慣れさせ、どうにか露天風呂まで辿り着かせるのもひと苦労だった。

夕食前にホテル自慢のギャラリーを見物した。多くはないが、ミロやシャガール、ローランサン、ロートレック、ロダンの粒ぞろいの作品が、私たちを迎えてくれる。が、ここでも子供たちの反逆に合う。大声は出すし、走り出すし、挙げ句は、早く晩ご飯にしようと合唱だ。低い声でも叱り飛ばしているうちに、名画鑑賞の気分など吹っとんでいる。

ホテルのレストランでの夕食では、わざわざお子様セットを注文したのに、これは嫌いだ、あれは食べたくないの連発。両親が頼んだコース料理など、腹の中のどこへ落ちたのかも分からぬほど。怒るのにも疲れ果て、黙々とデザートを口に運びながらふと横の息子を覗き込むと、椅子にもたれたまま眠っている。道理でまわりのテーブルの客たちが、先程から忍び笑いをしていたわけだ。

寝る前にもうひと風呂浴び、部屋へ戻ると既に皆高いびきだ。女房をつついてみたが、背を向けられた。うっかり目をつぶったが最後、昼間の疲れが出て、こっちも深い眠りに落ちた。おかげで、就寝前にと買って冷蔵庫で冷やしておいたビールを飲みそこねた。

翌朝は寝坊から始まった。制限時間ぎりぎりにレストランへ滑り込み、子供らを急き立てながらの朝食。時間ばかりかかって、なかなか食べてくれない。もったいないと、妻と二人で残飯を整理することになる。

二日目の目的地はえほん村。そこでたっぷり絵本を読ませ、親は楽をしようという算段だった。ところが、あにはからんや。一時間もしないうちに子供らは飽きてしまった。とても作家をめざす父の子とは思えない。

いったん昼食に連れ出すが、子供らの食欲がなく、体の具合が悪いのか、単に暑さのせいなのか、心配で妻と顔を見合わせる。

近くの牧場に寄り、子馬やうさぎ、アヒルたちと遊ばせると、また子供らは生き生きしだす。親もそれを見てほっとする。

再びえほん村へ戻り、父親は自分のために絵本を開くことにした。宮沢賢二の『よだかのほし』。なつかしい絵本だ。二十数年ぶりに読んだのだが、小説的ストーリー展開と詩的な文章に、胸を熱くした。妻もお目当ての絵本の原画に見入っているようだ。

暑かった日差しがようやく弱まるころ家路についた。これから最後の体力を振り絞って家族を無事我が家まで連れて帰らなければならない。動きだしてまもなく、ちびっ子ギャングどもはもう寝息をたてている。

途中こまめに休み休み、高速道をひた走った。灯ともしごろ、名古屋市内へ入ったが、ここでまた面倒が起きた。三人ともおしっこしたいなどと言う。最後の休憩所から一時間もたっていないのに。しばらく走ってから、私はパチンコ屋の前で車を止めた。

晩ご飯はMバーガーがいいと言うので、結局自宅近くの店まで走り、十時ごろようやく食事を終えた。

家に車が着く頃には、三人ともぐっすり眠りこんでいたのは言うまでもない。きっと楽しかった夏の一日を夢に見てるのだろう。

日本の女性が一生の間に生む子供の数が年々低下して、今や、一・五三人だそうだ。数十年後の社会問題が大いに取り沙汰されているが、うちは少なくとも平均値を上げている。

親の苦労は、今いくら言ってきかせても分からないのだから、せめてこうして証拠を書き残しておくのも悪くはないなと思う。

×

×